

# 産禅洞だより

■ 岐阜環境医学研究所・産禅洞診療所  
 ◎ 呼吸器疾患・禁煙治療・漢方相談  
 診 察 日：月曜・木曜・金曜  
 受付時間：9:00~12:00  
 〒502-0017 岐阜市長良雄越878-16  
 IP Tel:058-295-9545  
 FAX:058-296-3903  
 E-mail:zazendoh@ccn.aitai.ne.jp  
 http://zazendoh.town-web.net/

第119号 2014.2.1.  
 毎月1回発行 産禅洞診療所 松井英介



## 「健康ノート」、なぜ

松井英介

2011年の3.11原発大惨事から間もなく3年。テレビを見ていると、困ったことは何もなく、すっかり以前の生活に戻ったかのようです。エスカレータが止められ花見を“自粛”した3年前がウソのようです。ところが、仮設住宅や借り上げ住宅に避難して、ずっと不自由な生活を強いられている双葉町の人たちは、「今までは夢中だった、やっとこれからのことを、じっくり考えられるときが来たような気がする」と言います。一方、全国各地に避難し、精一杯努力してきたお母さんたちは、疲れが溜まってきているのも事実です。一番の原因は先が見えないこと。もう少し踏みこんで言うと、政府が原発被災者の生活再建の方針を示さないから。原発事故の原因をつかった政府の責任を考えれば、それはいかにも遅すぎる！ そう思われませんか？

被災した人たちは、「子ども・被災者支援法」の制定をはじめ、さまざまな形で政府に働きかけてきました。こう書いてみて、私は考えるのです。被災した人って誰だろう？ たとえば、全国に流通する食べ物の汚染を考えれば、自分の子や孫も被災者ではないのか？

ドイツのセバスチャンおじさんは言いました。「私たちは同じ船に乗っている！」。

努力が足らなかったのは、同じ船に乗っている私の方かもしれない。

そんな想いが「健康ノート」（「健やかに生きる—健康ノート 内部被曝からいのちを守る」）にはこめられています。ですから、3.11以降の自分をふりかえり、記憶を掘り起こし、記録する。名前は「健康ノート」ですが、「いのちのノート」と言いかえてもよい。「生活ノート」と考えてもよいのではないでしょうか。ちなみに英語では、いのちもくらしも人生も、ライフ life で間に合わせているようです。「健康ノート」のルーツをたどってみましょう。

1952年春、中学を卒業したばかりの若い女の子たちが、四日市の紡績工場に集団で就職、そこで生まれた「生活を記録する会」。彼女たちは戦後の新しい教育を受け、それまでの「紡績女工」とは違っていました。その彼女たちに新しい息吹を感じ、「生活を記録する会」を立ち上げたのは、後に四日市公害の記録を残した沢井余志郎さんです<sup>1)</sup> P.7。

「行動する、自立した人間を育てた」のは、沢井さんの功績であったと、鶴見和子さんは述べています。でも「そのために、沢井さんは、会社からも組合からもけむたがられる存在となった」とも<sup>2)</sup> P.7。

(以下、次号)

【参考文献】1) 沢井余志郎『ガリ切りの記 生活記録運動と四日市公害』（2012年）影書房、P.236

2) 沢井余志郎編 鶴見和子・田尻宗昭序『くさい魚とぜんそくの証文 公害四日市の記録文集』（1984年）はる書房 P. 10, 21~2